日川高校図書館

図書館通信　vol. 19

あけまして、おめでとうさぎ♪ 今年の干支（えと）は大好きなうさぎなので、ゴキゲンなせーやさんです。ユニコーンもそうだけれど、図書館にうさぎがわんさかいるなぁと思いませんでしたか？ 実は百羽以上（！）いたこともあります。おそらく日本中の図書館でいちばんうさぎのいる図書館だと思います。どうしてそんなにたくさんうさぎがいるのかって？ 実はうさぎは本ととっても相性のいい動物なのです。ミッフィー（うさこちゃん）とピーターラビットの２トップは言うまでもなく、うさぎの絵本は枚挙にいとまがありません。**『不思議の国のアリス』**で、アリスは遅刻うさぎを追いかけて不思議の国にたどり着くでしょう？ うさぎは夢の世界への案内人なのです。図書館にぴったりの動物だとは思いませんか？ せーやさんはそんなアリスのうさぎのような存在になりたいと思っています。さて、今年初の今号の図書館通信は、去年面白かった本を振り返る内容になっています。まだ読んでいない本は、ぜひチェックしてみてくださいな。どの本もおすすめ！ ハズレ無しです！ 本当に面白い本だけを紹介しています！

BOOK of 2022

『同志少女よ、敵を撃て』　逢坂冬馬（あいさかとうま）

何はさておきこの１冊！ 刊行後にロシアがウクライナに侵攻し、本屋大賞受賞となりました！「女性もまた、能力さえあれば戦地で戦うのだ。それを選んだのが自分たちだ」。女性のみで構成された狙撃兵（スナイパー）部隊。ありえない設定のように思われますが、第二次世界大戦の独ソ戦においては、百万人ものソ連の女性が従軍し、多くが自ら兵士として戦ったのです。その中の一人であろう女性狙撃兵の物語。彼女がいかにして百人の命を奪う狙撃手となったか。モスクワ近郊の農村で暮らす、大学進学を控えた 16 歳の少女・セラフィマの幸福な日常が突然奪われる。ドイツ軍に急襲され、母親ばかりか村人が皆殺しにされたのだ。現れた赤軍によって間一髪セラフィマは救われるが、リーダーらしき女性兵士は「戦いたいか、死にたいか」と尋ねてセラフィマの頬を張るのだった。そして、母の遺体と思い出の我が家を燃やしてしまう。敵（かたき）を討つ。母を殺したドイツ兵と、母と村のすべてを焼きつくした女性兵士に。女性兵士はイリーナといい、セラフィマをある場所へと連れて行った。そこは、女性だけの狙撃兵訓練学校。そこには、セラフィマと同じように家族や故郷をナチス・ドイツに奪われた少女たちがいた…。

『しろがねの葉』　千早茜

タイトルの「しろがねの葉」とは、銀の溶けた水を吸い上げて銀の行き渡った葉脈がきらめく葉のこと。「こんなきれいなものがあるのか」。「目にすれば、狂れるぞ」。貴重な銀のありかを知らせてくれます。戦国時代の銀山が舞台。銀を掘るために無数に穿たれた穴、間歩。その闇の暗さが描かれます。銀山のおなごは三たび夫を持つと言われます。長いこと潜れば石粉を吸って肺を病む間歩のなかでの過酷な労働が、男たちを早死にさせるのです。夜目が利き、暗闇を怖がらない子どもだったウメは、田を捨て逃げ出した両親とはぐれ、銀を採って人々が暮らす石銀集落で「銀の気が視えると謳われた山師」喜兵衛に拾われる。喜兵衛に間歩を見せられたウメは、目を凝らしても、凝らしても、見えない真実の闇を知り、初めて闇を怖ろしいと感じるのだった。喜兵衛に面白がられ、銀山の知識と秘められた鉱脈のありかまで授けられたウメは、女だてらに間歩で働き出す。ウメにとって喜兵衛は、親代わりであり、師匠であり、初めて愛した男でもあった。しかし、時代が徳川の世となり、喜兵衛は去ってしまうのだった。庇護者を失って銀の山に投げ出されたウメは、ひとりで生きていくための選択をする…。

『汝、星のごとく』　凪良ゆう

「登場人物だけでなく、読む人の人生にも踏み込まざるを得ないくらい本気の恋愛小説が増えてほしいですし、私自身、これからも書いていきたいと思います」。本屋大賞を受賞し、映画化もされた**『流浪の月』**の凪良さんの本気の恋愛小説！ タイトルは佐藤春夫の詩から。舞台は瀬戸内の小さな島。愛人のもとに父親が去って行ってしまった暁美。生まれてすぐに父親を亡くし、一時たりともに男なしでは生きられない母親に育てられた櫂。「普通ではない」親に振り回され、苦しんできた二人は高３で出会い、同じ孤独を分け合える恋人になった。二人はともに島を出ることを望んでいたが、櫂が在学中に雑誌連載を決めマンガ家としての将来を切り開いて東京へ行こうとする一方で、暁美は父親の愛人の家に火をつけようとするところまで追い詰められてしまった母親を見捨てることができず、島に残ることになった。東京で夢を叶えてプロのマンガ家になり、作品がヒットしてちやほやされる櫂。両親が離婚し、経済的な不安から高卒で地元の旧態依然の会社に就職した暁美。対等だったはずの関係に生じた不均衡。暁美は、櫂に女の影を見、自分に退屈していることに気づく。自分に価値を見いだせず、侮られる程度でしかない自分が悔しい。本当に相手のことだけを愛していた二人なのに、すれ違ってしまう…。

『川のほとりに立つ者は』　寺地(てらち)はるな

『水を縫う』を凌駕する大傑作！ カフェで店長をしている清瀬(きよせ)のスマホに病院から電話がかかってくる。恋人の松木が歩道橋からもう一人の男性と転がり落ち、二人ともに意識が戻らないという。実は彼女はずいぶんと長いあいだ、彼と会っていなかった。彼の部屋で、彼が隠していた『手紙の文例集』と女性の宛名が記された手紙の下書きの書かれたノートを見つけ、それが原因で喧嘩になったからだった。「隠し事」についていっこうにすっきり説明はされず、連絡は取り合っていてもずっとぎくしゃくしたままだったのだ。彼の部屋に行ってみると、ほかにもおかしなものが残されていた。清瀬が読んだノートとは別にもう２冊ノートがあり、それは小学生が使うようなマス目のあるもので子どものものらしき稚拙な字で埋められていた。また、ホワイトボードや漢字辞典、ひらがなドリルまであった。誰か小学生に字を教えていたというのか？ 歩道橋でいっしょに転倒した相手は「大事な友だち」で、喧嘩をした果ての事故なのだという。「やさしくて、素直で、まっとう」。そんな印象だった彼が喧嘩!? 清瀬は「わたしはいったい、松木のことをどれだけ知っているんだろう？」と不安に駆られる…。「わたしは今まで、松木だけじゃなく、誰のこともわかってなかったと思うんです。わかろうとしてこなかったんです。他人にたいして『なんか理由があるのかもしれん』って想像する力が足りなくて…」。

『ミーツ・ザ・ワールド』　金原ひとみ

27 歳銀行員の由嘉里はガチオタの腐女子だ。焼肉擬人化マンガ（焼肉の部位がそれぞれ性格づけられイケメンに擬人化されてＢＬ展開する！）『ミート・イズ・マイン』をこよなく愛している。現実の男とつきあったことはない。そんな彼女だが孤独を解消したい世間に一人前と認められたいみんなしてるしと婚活に目覚め、人生二度目の合コンに参加するが撃沈。夜の歌舞伎町で酔い潰れているところを美しいキャバ嬢・ライに拾われ、「あなたみたいになりたかった。あなたみたいに生きたかった」と告白して思い切り嘔吐した。彼女の部屋に連れて行かれるとこれがとんでもないゴミ屋敷で、ライは死にたいと思っている女の子だった。現実がどんなに楽しくても充実していても死ぬのだという。ライの汚部屋を片づけて、由嘉里はライと同居生活を始めることになる。「生まれてこのかた傍観者で観察者で、現実に１ミリだって触れたことはない」由嘉里は、ライと出会ったことで容赦のない現実へと飛び込んでいくのだが…。人生を味わい尽くす女性の物語**『デクリネゾン』**もすばらしかった！

『宙(そら)ごはん』　町田そのこ

「思いがこもった料理は、ひとを生かしてくれる」。宙には、育ててくれている「ママ」と産んでくれた「お母さん」がいる。物心ついたころには、厳しいところもあるが優しい母親の理想像のようなママ・風海(ふみ)に育てられていたが、実際のお母さんは月に一二度しか会えないママの三つ上の姉・花野(かの)なのだった。「お母さん」ではなく「カノさん」と呼ばせる彼女は幻のように美しく、思いっきり宙を甘やかせてくれて「お母さん」どころか「大人」の感じもさせない魅力的な彼女のことが大好きだったけれど、それはたまにしか会わないからだったと宙は気づくことになる。宙が小学校に上がるとき、夫の海外赴任に同行する風海のもとを離れ、花野と暮らし始めることになったのだ。待っていたのは、イラストレーターの仕事に夢中で日常は後回し、ごはんも作らず子どもの世話もしない、授業参観には来ないのに恋人とデートには行く母親との生活だった。幻滅させられてばかりの花野についには「やっぱ、無理。引き取るんじゃなかった」とまで言われ、家を飛び出した宙を救ってくれたのは、家にごはんを作りに通ってくれていた佐伯(さえき)だった。花野のことが好きで、商店街のビストロで働く佐伯は、とっておきのパンケーキを作ってくれたのだ。それは、風海が家族が元気になるために作ってくれた魔法の料理だった。「一緒に食べる、それだけで胸が温かくなる。もう大丈夫だ、そんな気持ちになる」。

『旅する小舟』　ペーター・ヴァン・デン・エンデ

「『目が釘付けになる』ということは本当にあるのだと私は知った」（岸本佐知子）。ベルギー発の文字のない真っ黒な絵本。黒い部分も途方もない時間をかけてペン１本で描き込まれているのです。ぜひとも現物を見ていただきたい！ そして感動してもらいたい、とんでもない絵本です！ 作者とおぼしき青年が、「月のひと」の力を借りて、一枚の大きな紙から舟を織りあげる。＜探索号＞から飛び出したそれは、大洋から比べればちっぽけな小舟に過ぎない。さまざまな生きものたち（実在するものも実在しないものも！）と出会いながら、小舟はマングローブの南洋を抜け、オーロラたなびく南極に辿り着き、工業地帯を越えると海底に沈んでしまうのだが、潜水艦に助けられて…。北太平洋からアントワープまでの世界半周のめくるめく冒険！ 最後のページを閉じたとき、あなたは「ものすごいものを見た」という感動に震えることでしょう！ 何度でも眺めたくなる本！

――――――せーやうさぎを追いかけろ！ では、図書館で。今年もよろしく♪